



八代深川栄左衛門の近代における業績 ～有田 香蘭社を訪ねて～

吉田 英弘



図1 香蘭社本社ショールーム

1. 有田・香蘭社をたずねて

ドイツ・ザクセン州の州都である古都ドレスデンには、ザクセン選帝侯・アウグスト強王の愛した数々の名宝が眠っている。壮麗なバロック建築、琥珀の部屋、黄金の部屋、ダイヤモンドの部屋など宝飾品で彩られた室内、フェルメールやラファエロのお馴染みの絵画・・・これら数々の名品を尻目になお強く私の心を打ったのは、想像を遙かにしのぐ夥しい数の古伊万里のコレクションであった。

アウグスト強王は兵士600人と壺151個を交換したという逸話を残すほどのヨーロッパ屈指の東洋磁器のコレクターであり、いち早く古伊万里を模してマイセン窯を設立し、ヨーロッパでは磁器の発展に先鞭を付けたパイオニアといえる。

さてその古伊万里の、いや日本の陶磁器の発祥の地有田は、この国の開国期外貨獲得のうでで特別な働きをした。その筆頭の企業が香蘭社である。いまやデパートに行けばテーブルウェアの一大ブランドとして定着している香蘭社だが、近代において何が私たちの今を支えているのかが知りたくて彼の地を訪れ、本社ショールーム（図1）にてお話を伺った。

2. 八代深川栄左衛門と香蘭社

幕末の動乱期に経営者として手腕をふるったのは八代深川栄左衛門である。徳川期より長崎貿易に深く関わり陶磁

器の輸出を行っていた佐賀藩だが、当時その許可を与えていた販売問屋は一手のみであった。八代栄左衛門は、この許可証である貿易鑑札を広く有田商人に授けるよう藩に命がけて掛け合った。これにより1868年（明治元年）、鑑札は十枚に増え貿易振興の足がかりとした。時は折しもジャポニスムの花開く頃。万国博覧会への出品は国の重要な政策の一つでもあり、八代栄左衛門にとっては海外への販路を広げる端緒ともなった。新政府後初めての万博、ウィーン万博では事務総裁を大隈重信、副総裁を佐野常民ら佐賀藩出身者が務めた。博覧会事務局は今の経産省に相当するが、ここにやきもの文化があったことは日本の運命を左右したことであろう。各国博覧会での輝かしい成功は有田焼の名を高め、輸出貿易に追い風となり、八代栄左衛門は長崎・出島に支店を出したり、当時の貿易港としては中心の横浜に進出したりと躍進をとげていく。この時設立された合本組織香蘭社は九州での企業の先駆けであり、この生産・販売体制の確立なしに海外との巨額の取引は実現できなかったと思われる。近代ドイツもあらゆる体制崩壊の荒波をかいくぐることを余議なくされたが、そのような中でもマイセン窯は国営の立場で保護されていたことに比べ、香蘭社は幕藩体制の崩れるこの激動期に民営の立場から自ら奔走して日本近代化の重要な役割を担ったことは特筆に値するだろう。

3. 香蘭社の美術陶磁器

八代栄左衛門は世界に通用する香蘭社の、そして有田の美術陶磁器を生み出すため、技術の向上や芸術性の追求をさらに図っていった。例えば、納富介次郎（製陶だけでなく画家としても活躍、教育者としても知られる）にデザインを依頼し、フィラデルフィア万博にも出品している。納富介次郎デザインによる香蘭社製品（図2(a)）や図案（図2(b)）が今でも残されている。色絵軍鶏文大壺（昭和初期）には、軍鶏をデザインした素晴らしい絵付けが施されている（図3(a)）。その元絵と思われる、辻 貞雄によるデザイン画が大きな額に入れて保存されていた（図3(b)）。

またG.ワグネルから石炭窯や絵具・釉薬、成形法等に関する西洋技術を学び取り入れていった。ヨーロッパ磁器草創期には日本の技術が一役買ったわけだが、時を経てヨーロッパで蓄積された製陶のノウハウが明治期に入り日本の製陶の技術革新をもたらしたとも言える。果敢な技術革新への姿勢は「ヨコハマ焼」として素晴らしい業績を残した横浜真葛焼の宮川香山との交流の痕跡にも窺える。

海外輸出が盛んだった頃の香蘭社の技術の高さは、現存している明治～大正期の製品からも明らかである。図4の色絵牡丹鳥文コーヒー碗皿は、裏側から絵付けの模様が透けて見えるくらい薄い。これはカップを極限まで軽くするための工夫だそう。ろくろ成形した後、生地が生乾きの状態で薄く削って作製されたと思われるが、焼成に伴う変形も考慮して製品とするには大変高度な経験と技術が必要であることは想像に難くない。現在、この復刻版が製品化されているが、当時の製品までには薄くできなかったのだとか。当然ながら、輸出製品は西洋の文化やニーズを色濃く反映しており、例えば口髭を蓄えた人用のコーヒー碗と

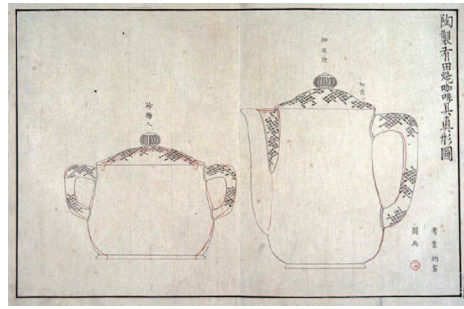


図2 (a)納富介次郎デザインによるシュガーポットと(b)その図案



図4 色絵牡丹鳥文コーヒー碗皿



図3 (a)色絵軍鶏文大壺と(b)そのデザイン画



図5 色絵楼閣山水文コーヒー碗

いった珍品も製造されていた(図5)。

4. 香蘭社の日本の近代化への貢献

美術陶磁器の輸出を成功させる傍ら、八代栄左衛門は新たな時代の工業製品も手掛けることになる。1870年、工部省・電信局の電信頭(でんしんのかみ)をしていた石丸安世から、電線の架設に不可欠な碍子の製造を打診される。当時の碍子はイギリスから輸入される高価なガラス製に限られていたが、これを国産磁器で作れないか、という石丸からの依頼だった。工業用の規格品の製造にはまた別の努力が必要であったろうが、これもわずか1年足らずで実現させ、電信局の通信網建設に伴い自社工場を整えていった(図6)。言うなれば、香蘭社は日本の近代化において先端を担いつつ、インフラストラクチャーにも貢献したということである。今ではこの分野で中東やアジアにも最新技術を供給している。

現在、美術陶磁器に加えて、碍子、そしてポロンナイトライドをはじめとするファインセラミックスが香蘭社の柱となっている。伝統に甘んじることなく、時代に即した最新技術を意欲的に吸収し新たな製品を生み出していくという八代栄左衛門の精神は、現在の香蘭社にも脈々と受け継がれていると感じた。



図6 明治~大正期の香蘭社製磁器碍子

本社にほど近い泉山磁石場にも足を延ばしたが、「土は米、土はいのち」というここ有田の風土の中で、山一つが人の手で削られ陶磁器に変わったことに思いを馳せると、この国の近代化を支えた人々の情熱が偲ばれる。

末筆ながら、今回の見学のご案内をいただき、貴重なお話をお聞かせいただいた香蘭社・福田貴央様に心より御礼申し上げます。

文献

山田雄久, 香蘭社社史編纂委員会編, “香蘭社130年史”(2008).

■筆者紹介 吉田 英弘

[連絡先] 〒305-0047 茨城県つくば市千現1-2-1 (独)物質・材料研究機構 E-mail: YOSHIDA.Hidehiro@nims.go.jp

■香蘭社 本社ショールーム <http://www.koransha.co.jp/>

[投稿歓迎-編集委員会では「ほっと」spring欄への会員からの投稿を歓迎します。編集事務局までご一報ください。]